

るとともに、心からお喜びを申し上げたいと考えている。

朝中五年の生活は校長としてではなく、諸先生方と同様、全身全霊をもって、生徒指導に体当りをしてきたものである。校長もなければ教諭もない。学級担任もなければ副主任もフリーもない。全教員がすべての子どもに、ひとりひとりの子どもに総力をあげて体当りをしてきたというのが適当な表現だろうと思う。

その五年の実践の一コマをここに記してみたい。

5 朝中五年——子ども像をもとめて

朝倉中学校五年の歩みのなかで、私たち二〇数名の教師は、教師としての教える権利と教えることの願いと、子どもの成長と発展の願いとを、どのようにして確立するために努力したか、その側面を「朝倉中学校同和教育序説」としてのべてみたい。

何より、「生徒を知る」ことを大切に考えた——われわれ教師は、生徒について知らない過ぎるのではないか、という反省が強く打ち出された。

私たちは、P・T・A懇談会や家庭訪問などの際に、父母に対して「もっとお子さんを知り理解してあげなければ」というし、同僚間でも、父母や地域社会やおとなの子ども理解の低さについて論議する。ところで、はたしてわれわれ教師が、教育専門家としてどれだけ子どもを知り理解しているだろうか。正しい子ども理解の上でどれだけ正しい指導がなされているかという疑問につき当る。

それは指導の過程で、私たちの考えている子どもと具体的ななまの子どもとの間には、大き

な開きがあるという事実に基づき、教育方法の妥当性を欠くことがしばしばあることに気付いたからである。

子どもの生活条件を知るよう努めた——子どもの理解の中味として、子どもの考え方や行動の基盤は何かを考えた。その結果、子どもの家庭や地域のもつ歴史性・経済性・社会性・文化性・学校の施設や設備の問題を考えなければならぬ。われわれは、クラスの子どもを同一次元でとらえ、それに画一的な教育内容を注ぎ込もうとしてきた。例えば、その土地が酸性土壌であるがアルカリ性であろうが、おかまいなしに酸性に弱いホーレン草の種をまくという愚かさをくり返してきたのではないか。ことばや理論の上ではわかりきったことではあるが、実際にはこの愚かさから抜け出ることができなかった。

個々の子どもについて、その生活条件を歴史的・経済的・社会的・文化的側面から具体的に明らかにすることが大切で、とくに部落問題を手がけるような場合、部落のおかれた歴史過程、つまり部落差別を具体的に把握しないでは、子どもの未来像を設定し解放に役立つ教育を確立することは困難であろう。

子どもひとりひとりがその家の伝統と歴史の中で占める位置を明らかにし、果たすべき役割を果たすとともに、所属する地域社会における使命を自覚し、その発展のため果す筋道を具体的に指導することが正しい教育のあり方であると考えた。

そのために私たち教師は、子どもの家庭環境・生活条件を具体的に知ること、併せて部落の歴史を知ることや、地域全体の職業や収入など経済生活についてできるだけ具体的に知るよう努力した。その中でも、とくに貧しい、苦しい、問題の多いと思われる家庭については、特

別に配慮してきた。

子どもの生活意識を明らかにしようとした——子ども達が生起する事象に対してどのような受け止め方をしているか。どのような願いや希望をもって日常生活を営んでいるかということや、教師や教師の指導をどのように見、どのように受け止めているかを知ること努力してきた。一部の父母は心配し首をかしげたけれど、「教師批判」「教師の勤評」とでもいうことを行なったり、あらゆる機会に、子どもの見方や考え方を自由に出さすよう努めてきた。ホーム・ルームの時間は、そのために多く費やされ、きわめて効果的であったと思っている。

生活態度を正しく統一的にとらえようとした——学校内における実態つまり、学習態度・作業状態交友関係者はもちろん、家庭や地区内における状態を明らかにしようとした。それとともに、その原因についても十分留意するようにした。

中学校では、学習態度だけについてみても、各教科担任によって、子どもの反応に著しい相違のあることが多い。このことは、教師集団の個々の生徒に対する理解の仕方に違いがで、指導の統一性と一貫性を欠く結果が出てくることがある。学校と家庭とで生活態度の著しくちがう子どもがいた場合、父母と教師との指導の統一性・一貫性が不能になって、往々にして、学校指導が誤って父母に受けとめられることがある。

こうした理由で、私たちは生徒の暮らし方を多角的に、あらゆる面から総合的に明らかにし、共通な認識と統一した指導が行なえるよう配慮した。

なお、そうした生活態度形成の条件を追求するなかで、能力的なものの性格的なものなど、先天的なものや後天的な生活条件的なものなどが明らかにされ、知能と学力と生活との関連性に

ついて深く考察するようになり、問題の所在と指導の方向が明らかになってきたように思う。

生徒の未来像を明らかにしようとした——私たちが子どもを教育し指導するということは、単に規定された教育内容を機械的に伝達するというのではなくて、その生活条件や生活意識なり態度なりが、千差万別である具体的な生きてビチビチしている子どもの現在の生活を充実し発展させるとともに、将来に向かって、その素質なり希望なりに即応できる子どもを育てあげることである。つまり、未来に向かって成長し発展していく子どもたちの個々の具体的要請に応えるものでなければならない。教師のしごととは、子どもと父母、子ども自身が設定する未来像に対して十分な助言と援助が必要であるが、なおその上に、意識化されない子どもの未来像についても掘り起こし、意識化するしごとが考えられる。

とくに、部落の子どもたちのもつ現状と未来像とを連結して、部落解放——人間解放の担い手とするための計画的・意図的な指導が最も大切となる。部落の解放を図ろうとする子どもを育てるには、各人の現状と未来像についてのカルテを作り、意識して創造し発展する方向に努力をし、引き出す手だてを講ずることが大切である。

子どもたちは、自分を知る方法はいくつもある。自己反省・自己評価による場合、学級集団による集団評価の場合、教師や父母による診断と評価などが考えられる。

子どもたちが相互批判や評価によって、自己変革——自己形成をなしとげるように指導してきた。

自分を大切にすること——人権を守るとか尊重するとか、他人の人格を尊重するとかいうことの前提には、やはり自分自身の価値に目ざめ、自分を大切にすることということが確立

されなければならない。そこで、自分を大切にすることとは、具体的にどういうことかについて理解を深めるよう努力してきた。「自分の生命・身体・財産——所有物を大切にすること」「自分の気持ちや考え・願いや要求を大切にすること」「自分の権利や義務をも大切にすること」。こうしたことを基盤にして、校内外すべての生活において、どのような考え方や見方・応じ方が自分を大切に、あるいは粗末にしているかを具体的に明らかにするように指導してきた。病氣にかからぬように、けがやあやまちをしない。持ち物を大切にすること。名前を書く。捨てた時は届け出る。長く使えるように手入れをする。自分の考えや気持ち、願いや要求はいつでも、誰に対してもはっきりいいきる。他に学習の邪魔をされたりした時は排除する。非行生におどされたり、圧力をかけられたりしないように、自分を守る。ホーム・ルームや討論の場合に自由に意見や気持ち、批判を発表するなどということが、ほんとうに自分を大切にすることであるということを理解させ実行させてきた。

すべてのもののいのちを大切にすること——自分を大切にすることは、自分のいのちを大切にすることで、幸福や平和や繁栄・自由平等を願う心を大切にすることである。

この考え方が、他人の人権を尊重し、博愛・奉仕・平和・自由と平等、差別をなくする考え方につらなるものであつて、さらに生きとし生けるすべてのものの生命——校庭の一木一草・鳥獣にいたるまでを大切にする心であり、さらに生命のない物象についても、その物のもつ本来の機能を大切にし、保護し保全をはかる精神につらなるものであることの理解を深めてきた。

子どもたちの心の奥底に、もののいのち・ものの機能を大切にし、守り愛し育てるというこ

とを培い、人の生命・人の願い・人の要求・他人の尊さを大切にすることを常に強調し、生活目標としてきた。

その他、「同和」教育の観点から、

人間を大切にすることの味は何か。

平和・自由・平等などの具体相について。

集団における相互批判の自由の保障や教育における最大の教育条件、とくに「同和」教育において重視される教師の問題について追求し、ある程度まとまった教師像も創造することができたと思っているが、紙数の関係上別の機会に譲り、この稿を終わりたいと思う。

(谷内照義)